

行為者としての「モノ」

——エージェンシーの概念の拡張に関する一考察——

ギギ・ファビオ

GYGI Fabio

1 序文

本稿は二つの目的を持っている。一つ目は、社会学の中で普及した心理主義的な傾向 (mentalistic tendencies) を検討し、批判的に評価することである。もう一つの目的は社会学の根本概念である「行為者」の再定義によって、「行為する」ということに人間と非人間の領域を内包させることである。したがって、社会と人間を捉えようとする時に、モノにその正当な場所を取り戻させることを目指している。

2 社会学における文化人類学の役割

社会学は西洋において、社会事象を研究対象にし、得られた知識によって社会を改善するプロジェクトとして発達した。支配者が自分が支配している国民についての情報を手に入れようとしたことから生まれた学問である。逆に人類学の起源は「他者の支配」につながる植民地に対する知識と理解である。当時、文化人類学の役割は「翻訳」という仕事であった。未開の民族が行う儀式や信仰を私たち (西洋人であると今でも思い込んでいる) に理解できるように説明することであった。彼らの行為が表現している表面上の非合理性を、合理性を持つ行為に翻訳することといってもよい。そのために、説明のレベルはメタレベルになり、彼らが行っている行為を直接に捉えるのではなく、「機能」あるいは社会的な役割として捉えることになってしまう傾向があるといえる。その翻訳の

仕事の副作用は、翻訳するたびに社会学者が用いている分析の言語の自然化が進んでゆくことである。もちろん現在では彼らと私たちとの間の絶対的な相違を安定したバウンダリーとして考えることは、もう現実から離れたものとなっている。本質主義的に領域と文化が一致しているという考えはハイブリッドとクレオール化の過程の概念に取って代わったのである。それにもかかわらず、社会学が利用している言葉は、科学的であるからこそ現実の特権的なアクセスを持つことを前提とする。通報者達から私たち社会学者に提供される情報は、社会学的な概念に翻訳することによって意味を持つことになると考えられている。しかし、社会学者が常に用い、客観的だと思われる言葉には、さらに豊かな意味合いが内在している。「人間」、「モノ」あるいは「行為」、「社会」は複雑な前提に支えられ、ある事情を考えることを可能にさせながら、他のことを考えられないようにしている。表面的には当然だと思われるものには、単純に見えるものほど複雑な意味合いが含まれていると考えられる。

我々が意識せずに使用しているその概念の背景に働いている形而上学の自然な感じを破裂させることは、現代の文化人類学の最も重要な役割だと思われる。現在のメイン・ストリームは、科学技術により得られた世界の支配に伴う標準化が生み出したものである。その中で絶滅しつつある辺境の知識・概念・信仰が重要な「思想の資源」となると考えられる。そういった立場から文化人類学

の目的は「翻訳」ではなく、土着の概念によって社会学者が使用している概念を考察し、新しい概念を作り上げることだと私は思っている。

では、いかなることを提案しようとしているかを具体的な事例で明らかにしていきたい。

3 エージェンシーの起源

「エージェンシー」という概念は、パーソンズが英語圏の社会学に導入してから、90年代後半の文化人類学の理論の中で再び注目を浴びるようになった。Agency はラテン語の *agere* (行う) という言葉に由来している。社会的な場面で他人とその環境に影響を与える何らかの *action* (行為) の可能性を意味している。パーソンズが開拓した構造機能主義の社会学では、人間は *actor* (行為者) として社会システムが制限しつつも提供する目標を達成する。その上、英語で *actor* と言った場合、「行為者」という意味に加え、「役者」という二つ目の意味も共存している。さらにゴフマンは社会的な場面を劇場に喩え、シンボリック・インタラクションの発展に貢献した。

エージェンシーはラテン語の *agere* に由来していると述べた。それは正しいが、パーソンズはその概念を彼がドイツ語から英語に翻訳したヴェーバーの『社会学の根本概念』から取った¹⁾。ヴェーバーによれば、社会学とは「社会的行為を解釈によって理解するという方法で、社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学」であり、その著作は社会的行為に関する諸概念の定義を試みたものである。社会的行為が、(1) 目的合理的行為、(2) 価値合理的行為、(3) 感情的行為、(4) 伝統的行為の4種類に区分されることは有名である。この中でヴェーバーは特に目的合理的行為に焦点を置く。なぜなら、近代以来の社会が目的合理性によって特徴づけられているからである。つまりヴェーバーの分析単位は意図を持

つ個人であることを主張したい。すなわち、社会や国家というものは分析の単位にはならないから、いわゆる「方法論的個人主義」である。

4 エージェンシーの問題

なぜそれが問題になってくるのか。文化人類学の立場から大まかに二つの理由をあげる。一つ目は支配と権力に関わる、いわゆる政治的な理由である。ヴェーバーは彼がいう「*Sinn*」(意味) というカテゴリーを社会学の中心に置く。その「意味」とは、個々の行為者が社会的に共有しているものである。社会的行為というものは「*sinnhaftes Handeln*」(理解の出来る行為をすること) である。したがって、そういう行動を取ることができない者は、社会の成員として認められない。社会的意味を共有していない二つのグループ、つまり社会の中で狂気とみなされた反体制者と、社会の外にいる辺境の民族、いわゆる「野蛮人」が、そういう理由で市民権を奪われたのは当然の帰結である。

それとつながっているのだが、二つ目の理由はその社会的意味の場に関する疑問である。社会というものが単なる個人の集合であるとするれば、その個人の動機に強い影響を及ぼしている意味はいかなる場所に構築されているのか。個人のエージェンシー (いわゆる行動力) を主張しているヴェーバーはその点でデュルケームと対照的な議論を述べている。デュルケームにとって、「個人」というのは社会学の方法でアクセスできない存在である。アクセスできるのは個人の動機と意図を超えた「社会的事実」のみである。社会の本質を捉えようとするその試みの相違から、「行動」対「構造」という二項対立が生まれ、それが今でも社会学において実質的に活用されているのである。

その二項対立を超越するために、様々な社会学者が多岐にわたる解決法を提案してきた。フラン

スの構造主義の開拓者であるレヴィ＝ストロースは「構造」を人間の思想の下敷きになるものと捉えた。彼によると人間が行為を行うこととは、極端に述べるとその構造が人間を媒体として行為を行うということである。言いかえると、人間は自分で考えるわけではなく、全体的構造によって考えさせられているのである。

逆にギデンズは人間が再帰的自己意識を持っていることを強調しながら弁証法的なアプローチを提唱している。彼は構造とエージェンシーのどちらかを存在論的に優位に立たせることなく、その二つを相関的に捉えて「構造の二重性」を唱えた。他方、ブルデューは構造とエージェンシーの間を媒介するメカニズムとして「ハビトゥス」の概念を導入した。「ハビトゥス」とは、個人が社会化によって獲得し内在化させた性向の総体であり、それが社会構造が再生産され変化する過程を支えている。したがって、社会は、一方に書籍や制度などのように物象化した社会と、他方にハビトゥスという形で身体化された社会の二つの側面を持っているというのである。

これらの議論のポジションに関わらず、本稿では、「エージェンシー」を挙げた理論のすべての対象が人間あるいは人間と認められている者に限られていることに注目したい。それは当然だと思われることも少なくないであろう。しかし、その存在論に感じている「自然さ」自体は私たち社会学者が見過ごしがちな点である。「個人」は単なる中立的な分析概念ではなく、西洋の思想の長い歴史の中で宗教的及び哲学的な含蓄に富むパラダイムであることを確認しておきたい。「個人」の概念を研究対象としている文献はたくさんあるので、こちらでは続いてエージェンシーの考え方についてフランス科学技術論のラトゥールと英国の社会人類学者のジェルの思想を挙げながら考察したい。

5 モノのエージェンシーを考える

まず、社会人類学者であったラトゥールは、民族誌という方法を現代の科学の実験室に当てはめ、社会人類学者がある儀式を記述するのと同様に、日々の研究過程その場で生じる人間関係を検討した。しかし「人間関係」といっても、実験室では人間だけでなく、人とモノの関係が重要であることに彼は気づいたのである。それが以降の研究方針に形を与える出来事となったと言っても過言ではないだろう。ラトゥールは、社会学者として概念装置（「人間関係」）は既に決まったもので、その限られた概念で捉えられない現象（人とモノの関係性）は存在しないというバイアスに反発を強く感じ、その後アクター・ネットワーク理論（ANT）の名で知られる新たな記述方法を唱えたのである。その特徴のひとつは、方法論的な原則にある。方針として研究過程の出発点からできるだけ何も前提としないようにするのである。すなわち、いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。その方法に従えば、内的意図を持ち、合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との絶対的区別はイデオロギーにすぎないことがわかる²⁾。ANTの核心は西洋の哲学が対立しているように捉えがちな「自然」と「社会」、そして「主体」と「客体」という近代的二分法から脱却し、「人間」と「非人間」のイデオロギー的区別を超越しようとしていることである。つまり、エージェンシーは人間の特権ではなく、モノもエージェンシーを持つことができ、エージェンシーそのものは人とモノの結合から生じて、アクター・ネットワークに分散されているというのである。

では、その常識に反する「モノは行動する可能性を持つ」という仮説は一体どんなことを表して

いるのか。事例としてラトゥールはドアクローザーを挙げる。ドアクローザーが常に機能していれば、それが果たしている仕事にはだれも気づかないが、壊れたらすぐ分かる。それゆえ人工物がどういった行動をしているか知りたいなら、その人工物がないことを想像して、その代わりに人がやらなければならない仕事をリストアップすれば、そのモノが果たしている「行為」を把握できるとラトゥールは論じる。ドアクローザーとドアを一体化したものとみなした場合、これによってまず毎回部屋に入るたびに壁に穴をあけて、部屋に入って、その穴をふさぐという行為がなされているわけである。そしてドアとドアクローザーを別の物とみなしても、ドアは開けられればそのたびに必ず自分で閉まるのであるから、その「閉まる」という行為によって、部屋に入れる「モノ(者/物)」を制限する。入れないのは、主に屋外にいてドアの使い方を知らない動物と、フランスでは病気の原因とされている隙間風である。

この事例から理解できるように、「物のエージェンシー」という言い方を可能にしているのは、意図(intentionality)を行為から分離するという捉え方である。そのために、ラトゥールはアクタント(actant)という概念を導入する。アクタントとは、関係性のネットワークの中で形づけられ、行為の媒体となるものである。したがって、「意図」というのは行為の基準でなくなる。ANTは、社会的事実としての「意図」は、行為の原因ではなく、逆に「意図」をネットワークが生じる行為の結果として捉える道を示した。

英国の社会人類学者アルフレッド・ジェル(Alfred Gell)は大きく異なる立場から比較的似たような指摘をする。ジェルの問題意識は美術分野の人類学から生じたが、ラトゥールと「行為者の意図」の問題を共有している³⁾。ただジェルの場合、それはある意味で美術史の遺品であって、西

洋の美術という概念が未開の世界に当てはめられるかどうかという問いから出発している。アーサー・C・ダント(Arthur C. Danto)の美術の定義に対し、彼は論文 *Vogel's Net: Traps as Artworks and Artworks as Traps* で自説を明らかにしている。ダントはカントの美学に従い「意図」を美術作品の定義の中心においている。美術作品の美と自然の美を区別するために、カントは「美術家の意図」という新しいカテゴリーを創出した。ダントはその定義をエスノグラフィック・アートに適用しようとしている。ある美術のコレクターは例えばあるアフリカの民族によって作られたマスクに美学的性質があると見なし、美術作品として収集している。しかし、そのマスクは元々儀式的道具として作られているので、美術的ではなく、宗教的な物であるとダントは述べている。ジェルはそれには納得していない。作人の「意図」が基準であるなら、未開民族が使用している「罫」は立派な美術作品として認めるべきではないかというのである。罫は物質文化では非常に重要なものである。つまり捕獲の手段である罫は、仕掛けられる動物の習性に関する知識の具体化であり、人工物として作ったあるいは仕掛けた人間の意図を表すだけではなく、実際にその動物を殺す代理の役割を果たすので、ハンターのエージェンシーの物象化であるというのである。

ジェルの最後の著作 *Art and Agency* は、より幅広い意味でエージェンシーを定義している。

“I describe artefacts as ‘social agents’ not because I wish to promulgate a form of material-culture mysticism, but only in view of the fact that objectification in artefact-form is how social agency manifests and realizes itself, via the proliferation of fragments of ‘primary’ intentional agents in their ‘secondary’ artefactual forms.” (Gell 1998: 21)

このように *objectification* とは、意図を持った存在 (=人間) のエージェンシーを、人工物の形に置き換えて展開することである。それを可能にしているのが、アブダクション (*abduction*) という過程である。*Art and Agency* はアートの人類学理論を標榜しているが、その分析対象は芸術作品に限定されるものではない。それは、「人と事物の社会的関係あるいは事物を介した人間同士の社会的関係によって、「モノ」が「人々」と結びつけられていく領域」を探る理論として提示されている。(Gell 1998: 12)

ここでジェルとラトゥールを比較すると、彼らが述べている意図の問題に対する解決の相違が明らかになる。ラトゥールは人間と物がエージェンシーの面でシンメトリックであり、平等であることを目指しているのである。他方で、上記の引用の「第一の」と「第二の」の区別から分かるように、ジェルは人間と物の間のヒエラルキーを残していきたいと考えている。ラトゥールの場合、人間であれ、動物であれ、植物であれ、物であれ、アクタントしか存在していない。どれが行動的に動いて、どれが受身的にその行動によって動かされるかは、各状況で新たに検討する必要がある。しかし、ジェルの目的はこのエージェンシーの領域の拡張ではなく、「個性」の概念の拡張である。彼が述べている分散された個性 (*distributed personhood*) である。

6 「持つ」という行為：

パフォーマンスとしての所有

ここで「所有する」というのは具体的にいかなることであるのか。現代に使われている意味を把握するための対策として、「所有」と対照をなす「共有」から考えればよい。「共有」しているものには、デュルケームによれば、社会的グループの印あるいはトーテムとなる可能性があり、個人の

存在を超えた集合的なアイデンティティーを示す力がある。共有している建物、道具、衣装などによって、個人と社会のつながりが物象化され、特に通過儀礼と宗教的な儀礼において、個人が抽象的な「社会」との一体感を得られるというのである。逆に「所有」ということは主に「私有」の意味で使用されている。その場合、所有することは他人の排除を前提としている。「私がこのモノを持っているから、あなたは持つことができない」という具体的な事情である。

しかし「私有」を優先する個人とモノの関係にはもうひとつの条件を加える必要がある。それは「選択」ということである。モノを購入する場合、色々なモノの中から選択する瞬間に、その意思決定は購入している人間のことを反映していることになる。言い換えれば、自分の持ちもの（この場合では日本語が可能にしている「所有する」と「手に持つ」両方の意味で）を自分自身の自己表現として捉えることができるのである。そういう消費の発達によって、所有者としての「個人」の新たな読み方が生み出されている。その「読み方」の前提は、モノの間主観的な存在である。人間は他人の価値観、意見、趣味などの社会的現象には直接アクセスできないので、モノによって客体化された個性を読み取ることができるのである。「所有」ということは、必ず他人の目に「所有している」ことが見えているというのである。

社会学的に訓練された目には、そのわずかな考察から、既に 20 世紀社会の変貌がみえてくるのであろう。物作りから商品化へ、共有から私有へ、生産から消費の強調へ、職業による識別から所有によるディスタクシオンへ、大衆社会から消費社会へ、公共のスペースからプライベートな空間へ、それらの全ては我々が精通している後期資本主義の姿である。

言うまでもなく、その消費社会における個人の

立場は、社会学において極めて強く批判された。フランクフルト学派のアドルノとホルクハイマーの「否定弁証法」の思想においては、消費者は絶対的社会システムとして考えられた「文化産業」の操り人形にすぎない。彼らが描いているディストピアでは、人間のエージェンシーは既に文化産業によって決まった選択に限られ、「傷ついた生活」をおくることしかないのである。そういった懐疑的な見方の起源はマルクスの「疎外」という概念にあると考えられる。賃金労働者であり生産力を奪われているプロレタリアは、彼らが作っているモノから離れ、逆に疎遠を生み出す力に支配されている状態になるというのが「疎外」である。それはマルクスが生産関係を主張していることに起因するとダニエル・ミラーが『大衆消費と物質文化』で論じている。ミラーは、マルクスの思想の元であるヘーゲルの理論に戻り、「専有」(appropriation)として捉えられている「消費」の過程には、「疎外」の結果を止揚する可能性があるとして述べている。そういう意味で、消費するということはヘーゲルの理論で表現すると「専有」ということになる。換言すれば、「専有」とは大衆生産によって作られたモノを自分のモノにし、そのモノを個人的な意味で満たすということである。

この二つの大変対照的な理論の共通点は、エージェンシーに関する考え方である。それは「デジタル」と呼んでもいいかも知れない。その理論では、ゼロか一しか考えることできないからである。前者では、人間は文化産業が形成している誤った良識で支配され、自らの行動力をほとんど持っていない。後者では、個人がモノを利用することによって内部性の事情を外側に表現するのである。これは西洋の「魂」の神話を復活させているのではないか。しかしその一方で両者とも、所有するというを片道の支配関係として考えてい

るといえる。私が持っているモノは私が好きなようにする。そういう意味で「モノ」は所有者の意志のなすがままになっている。その反面、消費者は、社会体制のなすがままになっている。欲しいと思うモノすべては文化産業によって意識に植え付けられた願望の所産である。

ここでの論点は、人間とモノの関係において、エージェンシーの方向性を理論上に固定することは不可能であり、その場で生じる関連性をケースバイケースで民族誌によって検討することである。「人」、「モノ」、「社会」というのは、独立している存在ではなく(それを解っていても、実際に実践するのは非常に難しい。一つは言語のせいでもある)、互いの関連性によって形を与えられ、その関係によって形成されている。極端な事例を挙げれば、奴隷制のような「なすがままになる」という不平等な支配関係の対象になる「者」は、その関連性によって変身させられ、「モノ」になってしまうことが解る。逆に、重病から回復した信者にとっては、薬師如来の彫像は人間と同じような生物でなくても治療的なエージェンシーをもっているのである⁴⁾。

両事例とも、主体と客体の関係は安定しているわけではなく、反対にその関係の安定性を守るために努力が必要である。奴隷が人間の状態に変わらないうちに監視と体罰の体制が必要であり、薬師如来が彫刻に変わらないために、崇拜と供犠を継続することが必要である。同様に、私たちが持っているモノに社会的な意味があると読み取られるように、無意識の内に努力を継続する必要がある。それゆえに、「所有する」ということは安定した関係というより、継続するパフォーマンスとして捉えた方がいいと考えられる。そのパフォーマンスによって、「モノ」は「物」にもなれるし「者」⁵⁾にもなれる。逆に、所有者である「者」も「物」になる可能性がある。所有者が所有してい

るはずの物に所有されていることも考えられる。英語で言う「possession」という言葉には二つの意味がある。その一つは「所有する物」である。そしてもう一つが「物の怪」という、外部から侵入して支配する霊的存在を意味するのである。これは偶然ではないと思えるのである。

以上を受けたこれからの課題は、あらゆる状況における所有のエスノグラフィーなのである。エージェンシーの不安定性を今までに出会った二つの事例で明らかにしたい。一つはテュービンゲン大学で行った物質文化の立場から見た「20世紀の戦争体験とその記憶の物象化」という研究プロジェクトである。もう一つは2006年から07年にかけて東京で行った「ゴミ屋敷」と「片付けられない女」のフィールドワークである。分野と方法は大きく異なるが、その中心にある人間とモノの絡み合いに関する問題意識は密接に関連していると考えられる。

7 「持つ」という矛盾：忘却の為に持つ

社会学において、社会の中の記憶という現象を捉えようとする概念が20世紀前半から幾つか発生した。受け継がれてきた伝統的な生活の破裂として考えられる近代の発展と共に、人の過去の記憶が大切になり、人間の社会化によって形成される記憶も研究対象となった。そこから生まれた二項対立的な概念は、発展中の近代科学の境目を探る争いを表していると考えられる。心理学と精神分析が扱う「個人的記憶」とアルヴァクスが唱えた「集合的記憶」、個人がナラティブな自分史を構築する「プライベートメモリ」と国家が民族的な儀式で形成する「パブリックメモリ」はつながっていても、分野によって区別して扱われることが多いといえよう。

この二項対立を脱するには、記憶の導管になるモノ（すなわち「者」と「物」の両方が考えられる）

に視点を置けばよいと考えられる。なぜなら、モノというのは個人と社会全体の境目を簡単に超えられる媒体であるからである。理論上確立されたカテゴリーは複雑に入り組んだ現実に向かい合うと早々に意味がなくなるのである。その上、「記憶」が一つの要素で形成されている事例はほとんどないと考えられる。例えば旅行先で購入した記念品はある出来事の個人的な記憶を支えている。しかし、その記念品は所有者との関係だけで終わることなく、購入した場所、そこであった出来事、一緒にいた人、その時の自分等、いわゆる三次元的な関連性の中に存在している。そういう三次元的な事情は質的研究法でしか把握できないと考えられる。

ここで挙げたい事例は、単純な「人とモノとの関係の研究」から発生したものの、間もなく複雑な探究に代わったケースである。そこではモノが媒介しているユダヤ人、戦争体験、地理、国籍、アイデンティティーとの絡み合いを考えなければならない。

フレッディ・ラファエル氏はストラスブールの大学の社会学名誉教授である。彼自身、ユダヤ人であり、アルザス地域における近代史と記憶文化の研究者として知られている。彼の家々に代々伝わるモノとして、大型砲弾の薬莖が寝室の本棚の左右に置かれている⁶⁾。その薬莖は第一次世界大戦時ロシアの戦場で亡くなった、ラファエル氏の母方の祖父の遺品の一つである。高さ23センチ、口径8.5センチで、底に「デュッセルドルフ1915年7月」と生産場所の銘が刻んである。接触できるモノとして祖父との最後のつながりであり、そこには感情的な記憶が宿っている。そして墓参りできるお墓がなかった祖父の最後の安らぎの場所ともなっているとラファエル氏は述べた。その薬莖がたまに花で飾られ花瓶にもなっていることは、死より生を強調することを意味しているとい

う。しかし、そのポジティブな意味性の反対となるもう一つの「ネガティブ」とみなされた遺品がある。祖父はドイツ帝国に戦功のあった軍人に対して授与された鉄十字章の持ち主でもあった。その鉄十字章の存在は家族の中で恥だと思われ、秘密にされていたという。ラファエル氏は葉莢が飾ってあった部屋で成長してきたが、鉄十字の存在は叔母の死後初めて知ったという。その理由を把握するために、まず大変複雑な記憶の光景を照らし出す必要がある。アルザスという地域は、ドイツとフランスの境目にあたり、1870年までフランスに属してはいたものの、同化はしていなかった。その後普仏戦争でドイツ帝国に占領され、第一次世界大戦の後にフランスに再占領されたのである。1940年から1944年までナチス・ドイツに再度占領され、戦後にフランスの領土に戻ったという政治的に複雑な歴史を持つ地域である。したがって、属する国が一瞬で激しく変わると共に、その国家体制の支持を表した物質的な印の意味も激しく変わってしまうのである。ドイツ帝国の国民として生まれた祖父は、アルザス人への差別（旧フランス領であったから、特にドイツ帝国軍隊に疑いの目で見られた。ツァーベルン事件を参照）を克服し、その上、ユダヤ人への差別を乗り越えようとした。そのためにドイツ帝国の兵隊に入って、戦争に貢献し、ユダヤ系ドイツ人として認められるに値する希望を持っていた⁷⁾。その鉄十字章は国家の認識のシンボルとして力強い印象力を持っていても、アルザスがフランスに返された瞬間に、ドイツ帝国のアグレッシブな態度の表象となり、新しくフランスの国民になったアルザスのユダヤ人も元の状態に戻らなければならなかったのである。

葉莢は逆に国家と個人のつながりではなく、個人とその戦争経験を媒介していると思われる。底を見ないとドイツ製であることも分からないか

ら、そして花瓶に変身することが出来るから、直接の政治的な意味は抑圧しやすい。祖父の希望と祖父の戦死の証言者としての記念碑となっているといえる。しかし時が経つにつれて、個人的なバイオグラフィーを持つモノには新しい意味の層が重ねられることもある。ラファエル家の場合、第二次世界大戦の時にナチスに貴重品をすべて没収されたが、避難するときに遺品を二つだけ持って行けたという。それは葉莢と好まれていなかった鉄十字章であった。

ラファエル氏によれば、彼の家族が戦後にアルザスの里に戻った時に、ナチスから救われたモノに新しい重要性が訪れた。彼が民族の歴史の研究を始めた時、普通の歴史研究の方法で欠片、つまり残っているモノを研究しようとするのではなく、なくなったモノ、跡形なく消えてしまったモノを探求しようとした。第一次世界大戦の戦没者記念碑から消えたユダヤ人の名前、ウィンツエンヘム村の墓地から消えたユダヤ人の墓、地方の人々の深い沈黙。その沈黙を破らせるには、8年かかってしまったという。その結果、ナチスが公私にわたって記憶の全体的支配に過剰に固執していたことが明らかになった。フランスから取ったアルザスをまず浄化しなければならないという、ファシズムの典型的考え方を示したのである。その「民族浄化」つまり異民族であると考えられたユダヤ人を迫害し、追放した結果、アルザスはナチスの用語で「judenrein」（ユダヤ人から清めた領土）になった。そこにはもちろん記憶の浄化も含まれるのである。それはラファエル氏の言葉に端的に示されている。「ユダヤ人がいかなるときにでも存在していなかったようにしたかったんだ。私の家の三世代は消えてしまった。死者さえ追放された！」

この点で明らかになるのは、ナチスの誇大妄想的な「忘却プロジェクト」であった記憶と、その

導管である「者」と「物」の絶滅という目的である。

鉄十字の事例から分かるように、モノを持つというのは、ただシンボリックな関係ではなく、具体的な結果を及ぼすことである。理想とした自分史と自分が持つモノの経路が正しく整列しているなら、そのモノは自分の社会的、自分史的位置を表現することができ、モノは従順であるといえる。しかし、自分の経路と自分が持つモノの経路にトルク⁸⁾（ねじりモーメント）が与えられると、安定状態が崩れ、モノのエージェンシーは主体にとって望ましくない結果を及ぼすこともある。鉄十字はドイツ帝国の国民であることに値する表象となったが、当時フランスに返されたアルザス人とユダヤ人のダブル・アイデンティティーを持った人間にとっては、危険な存在にもなっていたのである。又、ナチス・ドイツ占領下では、ナチスがユダヤ人とドイツ帝国のつながりの証拠を根絶しようとしていたので、それを持つユダヤ人にとっては、更に非常にリスクの高い所有物であった。既に恥と思われたのに、なぜ処分しなかったのであろうか。それは、もしもその時処分したら、二等国民ではなく、一等国民として認められる夢も破れ、ナチス側の忘却プロジェクトの勝利になったからだという。モノに預けた記憶は忘却に対する防壁となることもある。

8 「持つ」という病気： 医療化されている所有

先にトルクという概念を用い、所有者と所有物の経路が整列していない事例を挙げた。その経路の期待には理想とした人間とモノのあり方が内在し、規範的な要素が存在しているのである。そのモノの経路（購入・使用・整理・処分あるいはリサイクル）をきちんと守らない場合、モノは人のカテゴリーを圧政的に誘導する力を持つようになるの

である。それは「片付けられない女」と名付けられた現象でわかると思われる。「片付けられない女」はサリ・ソルデンの著作の「Women with Attention Deficit Disorder」の日本語訳のタイトルである。そこで次のように語っている：

『片付けられない』という悩みをかかえる女たちがいる。持ちものが片付けられず、用事が片付けられず、頭の中の考えさえも片付けられず、毎日の生活にひどい苦勞をしている女たちがたくさんいる。彼女たちは、雑用の山に圧倒され、すっかり落ちこみ、不安と闘っている。人間関係がうまくいかない人、潜在能力はあるのに、学業や仕事で力が発揮できない人も少なくない。そしてこういう『片付けられない女たち』の中には、神経系の障害が原因で苦勞をしている人たちがいる。そんな障害の一つに、注意欠陥多動性障害（ADHD）がある。（ソルデン 2000：10）

英語の本文の中でより抽象的な「organize」という動詞が使われているのに、日本では「片付けられない女」という名称で普及した。彼女たちは元の ADHD（注意欠陥多動性障害）から離れた、社会問題に近い理解での「モノを捨てられない・片付けられない未婚の 20 代後半の女性」なのである。「のだめ・カンタービレ」で更によく知られるようになった。本稿では「片付けられない現象」そのものではなく、そこで生じる現象の捉え方と問題意識を検討したい。

マスコミのコメンテーターに注目を浴びた「片付けられない女」現象の特徴は、彼女たちが仕事場で目立たないということである。「女性 SPA！」の記者は次のような記事を書く：「『部屋が汚い女』は珍種に非ず。職場で真っ当に OL しているツターの娘さんたちの多くが、自宅ではゴミの中

で生活しているのだ。彼女たちは「もしかして、うつ病」と深刻ぶることもなく、彼氏に対しても取り繕わない。」

ある意味で「片付けられない」現象は「綺麗／汚い・整理されている／散らかっている」という対照から形成されているのではなく、プライベート・スペースと公の空間の境界線で生じるのである。なぜかという、他人が入らない部屋に閉じ込められたモノのエージェンシーは制限されているからである。最もスキャンダラスに見られている「彼氏に対して取り繕わない」人にはフィールドワークで出会ったことない。逆に、他人が部屋に入った時に、初めて「私はいわゆる片付けられない女」であることに気づいた人が多いのは興味深い。小林さんの場合もそうであった。隣の工事で家に悪影響を及ぼさないように、工事前と工事後に調査団体が写真撮影にきた時のことであった：

調査団は、家の中のすべての部屋をつぶさに見て回り、写真撮影。壁のヒビの入り具合や、柱のゆがみ具合を特に注視してようでした。彼らについて回っていた私は、家の中の散らかりようを見られるのが、顔から火が出そうなくらい恥ずかしく、『散らかっていて、申し訳ありません』『散らかっていて恥ずかしいです』『なんでこんなに散らかってるでしょうねえ』などと連発したのです。(小林 2005 : 32)

その事件の前は散らかっている状態をあまり気にせずに過ごしていたが、その時からセルフ・イメージを修正し、自分は「片付けられない女」である⁹⁾ことを認めた。その瞬間に何が起こっていたのか。フィールドワークでインタビューした調査協力者のほとんどが似たような経験を話してく

れた。普段は「ただそこにある」日常生活の名残であるモノが他人（彼氏であろうが、親であろうが、調査団体員のような見知らぬ人であろうが）に見られたら、今度は自分がそのモノに「だらしない」「執着のある」ような人間として物象化されてしまうのである。その他人の目を借りて、自分の客観的な見方が可能になる瞬間は、調査協力者の生活の中で大きな転換点となっていたという¹⁰⁾。他者の眼差しで見ると、自分から分離している「自分」とその「自分」が持つモノが同化してしまうことである。その前に特に何とも思っていなかったモノは部屋にしまっていたので、社会的なエージェンシーを果たすことができなかった。が、プライベートな空間の損壊によって、それは見えるようになり、社会的に有効になったのである。

「片付けられない女」「ゴミ屋敷」などの、人間とモノの関わりが問題視されている場合には、「何らかの精神的な異常である」という説も盛んである。「片付けられない女」の場合は「大人のADD」¹¹⁾であり、「ゴミ屋敷」の場合は一般的な認知症から分裂病まで幅広い範囲の可能性がある。病理的な見方の下敷きになっている「行為」は、部屋やマンションの散らかっている状態を頭の中の散らかりに変化させることである。つまり物質的環境の「外側」から精神の「内側」に「翻訳」することである。つまりエージェンシーのローカスはモノと所有者との関連性から離れ、結局伝統的に人間の意思のローカスと見なされている「脳」にしか存在していないことになる。そういう意味で精神の異常という概念は、関連性を無視する本質主義を支えているのである。

人間（この場合に特に若い女性）とモノの関係に対する関心・懸念の副作用として、新しい「モノの正しい持ち方」といえる規範的な考え方が生じるのである。現在日本に唯物論の批判として登場

し、広まりつつある「断捨離」などのセルフ・ヘルプの思想は、仏教における「執着」の概念を大衆消費に当てはめている。モノに感じる執着は精神的な負担となり、人間関係と自己開発の障害になっていくという考えである。そういう理由でその瞬間に必要としていないモノを捨て、また必要となったら新たに買えばいいというのは、最終的に消費の循環の加速をもたらすだけではないかと考える。

9 終わりに

今までに挙げた事例で「モノがエージェンシーを持つ可能性」を明らかにしたかった。モノのエージェンシーが可能になるのは、客観的か主観的かの見方の相違、あるいはエミックかエティックかの見方の相違ではなく、我々社会学者が常に使用する根本概念が確立している境界線の移動である。「行為する」に内在的な意図を持つことが必要条件となっていなければ、モノを人間のエージェンシーの導管として見なすことが可能になる。モノがあふれ、人間に反応する新しいモノの発展が徐々に進んでいく現代と未来においては、人間とモノによる新しいハイブリッドの可能性を理解するために、遅れた時代の偏見を乗り越える概念が必要となるのではないであろうか。複雑に入り組んだ新たな現実を捉え直すために、社会学者が用いた方法によって、現実を記録するチャンスが与えられなければならないと考えられる。社会現象を捉える正確性は社会現象を捉えようとする網の目の細かさによるのである。

[注]

- 1) 「社会的行為」は「soziales Handeln」の訳語であるから、ドイツ語で「役者」を表すのは不可能である。
- 2) 日本語では「モノ」という単語は「者」と「物」の意味を含んでおり、その絶対的な区別はない。

日本語の意味合いの立場からのラトゥールの批判は、Fukushima (2005) を参照。

- 3) お互いの事を知っていたかは私が理解するかぎりでは不明である。二人ともお互いの著作を引用しておらず、「意図」とエージェンシーに関する興味しか共有していないと考えられる。引用している先行研究もほとんど異なる。
- 4) そういった事例は普段社会学において信仰 (= 迷信) として扱われている。生物でない彫刻が信者のプロジェクションによって命を持つようになるというアニミズムの説である。しかし、私たち社会学者は生物と無生物の境目に対する確信をどのようにして得ているのか。もしかしたら信者の行為に対する解釈は、社会学者達の自説の投影にすぎないのであるか。
- 5) この「者」は「社会的他者」という意味で使っている。
- 6) テュービンゲン大学には「実験的文化科学」(Empirische Kulturwissenschaft、旧「民俗学」という科目があり、その履習における特徴は「Projektstudium」(「プロジェクト研究」) である。それは三年生が一年間に渡って学ぶ授業であり、そこでは基本コースで得られた全ての知識を活用する。最終目的は集めたモノの展示と著作の出版である。ドイツ学術振興会はテュービンゲン大学で開かれた「特別研究領域 437：戦争体験：近代における社会と戦争」の協力を得て、ドイツ・フランス・イギリス各国の博物館を巡り、第一次世界大戦で塹壕の中の兵隊達もっていた大衆戦争の名残で作られた記念品・形見を集め、展示した。インタビューは2002年3月5日にストラスブールでラファエル氏の自宅で行った。
- 7) そういった希望は都市部で融和を目指すユダヤ人の間に広く普及した。歴史的出来事を共有できさえすれば、自分たちも第一等の国民として認められることになるという思想である。結局ナチスの熱狂的な反ユダヤ主義でその希望が失望になった。
- 8) Bowker and Star 1999 を参照。
- 9) 小林さんは本名である。中年で結婚しているので、典型的な「片付けられない女」のイメージから多少はみ出ている。
- 10) 調査協力者は皆自分が「片付けられない女」であることを自発的に言い出した。
- 11) 「大人の ADD」とは、大人の場合臨床上あまり見ない多動性 (Hyperactivity) が抜けた Attention Deficit Disorder (注意欠陥症候群) のことである。

【参考文献】

- ヴェーバー, マックス (1922) 『社会学の根本概念』(清水幾太郎訳) 岩波書店
- 小林光恵 (2005) 『「片付けられない女」は太る』新講社
- Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bowker, G. B. and Star, S. L. (1999) *Sorting Things out: Classification and Its Consequences*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fukushima, M. (2005) On Small Devices of Thought: Concepts, Etymology and the Problem of Translation. In: Latour, B. and Weibel, P (eds): *Making Things Public: Atmospheres of Democracy*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Gell, A. (1998) *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Gell, A. (1999) *The Art of Anthropology: Essays and Diagrams*. London: Athlone Press.
- Giddens, A. (1984) *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*. Cambridge: Polity Press.
- Gygi, F. (2002) „L'objet ne parle pas de lui-même, il faut qu'il soit interrogé“. In Projektgruppe Trench Art (eds) *Kleines aus dem Grossen Krieg: Metamorphosen Militärischen Mülls*. Tuebingen: TVV.
- Latour, B. (2009) Where are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artifacts. In: Candlin, F. and Guins, R. (eds): *The Object Reader*. London: Routledge, pp.229–254.
- Solden, S. (1995) *Women with Attention Deficit Disorder: Embracing Disorganization at Home and in the Workplace*. Grass Valley: Underwood Books. (ソルデン, サリ (2000) 『片付けられない女たち』(ニキ・リンコ訳) WAVE 出版)

【執筆者紹介】

ファビオ・ギギ

同志社大学社会学部社会学科 助教

fgygi@mail.doshisha.ac.jp